異邦人

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異邦人

【Nコード】

N1380I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ガンジス河で楽しく暮らす鰐達。ところがそこに海から鮫がやって来て。ガンジス河では実際に鮫が入って来ることがあります。

第一章

異邦人

インドにおいてガンジス河は聖なる河であるとされている。ヒンズー教徒達は一生に一度この河に参り身体を清めることを至上の喜びとしている。しかしこれはあくまで人のみのことであるらしい。

この河には鰐達もいる。当然ながら彼等にもその生活がある。河の中で魚を捕り獲物を待ち構えてそのうえで生きている。そうして晴れた日には丘にあがって日向ぼっこを楽しんだりしている。それが鰐の生活だ。

そうやってこの日も彼等なりに穏やかな生活を送っていた。しかし不意にここで。全く見たこともない不思議な魚がそこに来たのである。

「あれっ、こいつは何だ？」

「見たことがないな」

鰐達はその魚を見て言うのだった。魚はやけに大きく背は青く腹は白い。そうして尖った顔に小さな目、そうして下に大きな目を持っているのだった。

尾は大きく背鰭が特に大きい。泳いでいるとそれが河から出てやけに目立つ。鰐達はその魚を見ていぶかしみながら話をしていた。

「食べるにしても大きいしな」

「それにやけに人相が悪いな」

「いや、この場合は鰐相だろ？」

「魚だから魚相か？」

こんな呑気なことを話してるとだった。魚の方から言ってきたのだった。彼等に対して。

「あんた達は何だい？」

「何だいって」

「俺達のことを知らないのか」

「ここを上っているうちに何度か見たけれどな」

魚は河の中を泳ぎながら言う。河は広く岸と岸が見えない程だ。

その河の中をひっきりなしに泳いでいる。決して止まることがない。

「何なんだ？本当に」

「わし等は鰐だ」

「鰐っていうんだよ」

彼等は丘と河の中からそれぞれ魚に答えた。

「何だ？本当に知らないのか？」

「あんたこそ見たこともない魚だが」

続いてこんなことも話す鰐達だった。

「何者なんだ？一体」

「河では見たことがないぞ」

「わしは鮫というのだ」

魚はこう語るのだった。

「鮫というんだ。海から来た」

「海！？」

「海という」と

鰐達は鮫と名乗ったその魚の言葉を聞いてまずは顔を見合わせた。

そうしてそのうえで鰐達の中でひそひそと話をするのだった。

「確かあれだよな、河を下ればだったよな」

「ああ、何時か辿り着くっていうな」

「とてつもなく広い水の場所だよな」

「しかも水が塩辛いんだよな」

「確かな」

彼等が知っているのはこの程度のことだった。誰も海のことは知らない。彼等にとっては全くの別世界の話であったのだ。

「そんな場所から来たのは？本当に」

「あんたは」

「ああ、そうなんだ」

鮫はそこから来たたと鰐達に答えるのだった。

「その海から来たんだよ」
「そういえば海にはかなり大きな魚がいるっていうけれどな」
「ああ、らしいな」
「そうみたいだな」
また彼等の中で話をする。やはり知らない話だった。
「それがあなたか」
「鮫っていつのか」
「わしの他にも大きな魚はいるんだよな」
ここで鮫はさらに言うのだった。
「鯨とかな」
「鯨!？」
「何だそりゃ」
「聞いたこともないな」
鯨は鰐達には聞いたこともない言葉だった。
「それが大きな魚だっていつのかい？」
「まさかとは思うけれどな」
「そうさ。あなた達より大きいな」
鮫はひつきりなしに泳ぎながらそのうえで答えるのだった。
「倍以上な」
「おい、わし等より大きいのか」
「まさか。そんなことはない」
「有り得ないぞ、そんなことは」
鰐達は彼のその言葉を信じようとしなかった。嘘だと言うのだ。
「わし等は象より大きいのだぞ」
「虎よりもだ」
「そのわし等より大きいものがいてたまるか」
こう言って否定するのだった。鮫のその言葉を。

第二章

「わし等がこの世で一番大きいのだぞ」

「確かにあんたもかなり大きいかな」

「わし等と同じ位か？」

その鮫を見て言う。鮫はとにかくひっきりなしに泳いでいるのでその姿がはつきりと見える。大きさは大体彼等と同じ位であった。

「それ位じゃないか」

「そのあんたよりもずっと大きいのか」

「大きい大きい」

鮫はこう彼等に応えるのだった。

「もうな。どれだけ大きいかな」

「わし等の倍以上か」

「そんな奴が本当にいるのか」

鰐達は鮫の話を聞いてもすぐには信じられなかった。

「まさかな。本当にな」

「そんなのがいるのか」

「それがいるんだよ」

また話す鮫だった。

「海にはな」

「海はそんなとんでもない世界なのか」

「わし等よりずっと大きな奴がいるのか」

「それもうじゃうじゃといるんだよ」

また話す鮫だった。

「海にはな。どれだけいるかわからないんだよ」

「とんでもない世界だな」

「全くだな」

鰐達はここまで話を聞いてあらためて言った。

「そんな世界があるのか。本当にな」

「物凄い世界だ」

「恐ろしい」

「いやいや、これが恐ろしくはないんだよ」

鮫はそれは否定するのだった。鰐達を周りにおいてやはり泳ぎ回りながら。

「それも全然。楽しんだよ」

「楽しい世界なのか」

「そんな場所が」

「色々な動物がいてさ」

鮫はまた彼等に話してきた。

「面白いんだよ。一度住んだらもう離れられないな」

「そこまで面白いのか」

「一体どんな世界なんだ」

「それよりもだよ」

ここで鮫は話を変えてきた。

「あんた達さつき言ったよな」

「さつき!？」

「何をだ？」

「だからさ、象とか虎とか」

彼が尋ねるのはこのことだった。

「それってどんな動物だい？」

「知らないのか？」

「普通に川辺に来たりするじゃないか」

鰐達は鮫の言葉に目を丸くさせることになった。

「それ見たことないのかい」

「まさかとは思うけれど」

「わしはあれなんだよ」

鮫はここでそのまま泳ぎながら鰐達の言葉に答えたのだった。

「水からあがれないんだよ」

「ああ、魚だからな」

「だからか」

「そうさ。魚は水の中から出られないだろう？」

彼が言うのはこのことだった。鮫もまた魚である。魚ならば水から出ることはできない。このことを鰐達に対して話すのであった。

「あんた達のそれは鱭じゃないな」

そしてその太い身体から出ている小さな四つのものを見て言うのだった。

「それは一体」

「ああ、これは足っていうんだよ」

「足か」

「そうさ、泳ぎにも使えるし水の上に出ても使える」

こう鮫に対して説明するのだった。

「かなり便利なものさ」

「そうか。水の上から出られるのか」

鮫は彼等の話を聞いて言葉を少し変えてきたのだった。

「羨ましいな、それはな」

「羨ましいか？」

「ああ、羨ましいよ」

実際にその言葉はかなり羨ましそうなものだった。鮫の本音がそこに出ていた。

「わたしにはできないからな。それどころか」

「それどころか？」

「わたしは泳ぐのを止めることができないからな」

このことを言うのだった。今度は。

第三章

「どうしてもな」

「ああ、そういえばあんたさつきからずっと泳いでるよな」

「止まらないでな」

「だから。止まることができないんだよ」

あらためてこのことを鰐達に対して話した。

「絶対にな」

「へえ、そりや大変だな」

「ずっと泳いでないといけないのか」

「身体が疲れるだろ」

「いや、全然」

しかしそれはないというのである。鮫自身は。

「身体は疲れないさ。平気さ」

「ずっと動いてるのにかい？」

「またどうしてなんだ？」

「わしの身体がそういうふうに行き来しているからなんだよ」

だからだというのである。

「だからな。わしは幾ら動いても疲れることはないんだよ」

「だからか」

「そうさ。それにしてもあんた達の話をもっと聞きたいな」

あらためて彼等に述べるのだった。

「色々とな。聞かせてくれるか？」

「いや、それよりもだよ」

「こっちこそだよ」

鰐達はそれぞれ彼に対して言葉を返してきた。

「あんたのその話を聞きたいな」

「海のことをな」

「じゃあお互い話していくかい？」

鯨は彼等の言葉を受けてこう提案してきたのだった。

「それだつたらさ。お互いのいる世界のことをな」

「おお、そうだな」

「それはいい」

鯨達も鯨の言葉を受けて一斉に喜びの声をあげて応えた。

「じゃあな。早速な」

「まずは虎や象のことだがな」

「ああ」

彼等はお互いのいる世界のことを話した。途方もない大きさの本足の鳥賊のことも海の中の鯨以上に凶暴なシャチという生き物のことも。鯨達も丘にいる虎という誇り高い動物や猿という頭のいい動物のことも。お互い全て話し合ったのであった。

数日が経った。鯨は泳ぎながら寝て鯨達は川辺で寝る。そうやって数日間話して寝てそれを繰り返した。そうしてその中でお互いが知っていることを全て言い合ったのであった。

「いや、海って凄いな」

「全くだよ」

鯨達は鯨から聞いた海の話聞き終えてこう言うのだった。

「そんなに凄い世界なのか」

「あんたはそこにずっといたんだな」

「そうさ。いや、それでもだよ」

今度は鯨が彼等に対して応えるのだった。

「あんた達もいい場所に住んでるよな」

「そうかい？」

「そんなにいいかい？」

「いいさ。だつてな」

そしてここでその鯨達に対して話すのだった。

「河もよく聞いてみれば凄くいい場所じゃないか」

「そうかい？」

「そうだ。川辺の綺麗な場所は見られるし」

まず言うのはこのことだった。

「そして色々な陸の生物も見られてさ」

「そんなにいいのか」

「こつちの世界も」

「いいさ。とてもな」

また話す鯨だった。

「ずっと過ごしたいと思う位さ」

「じゃあずっとここにいたらどうだい？」

「だよな。あんたさえよければ」

「どうだい？それで」

「いや、止めておいた方がいいな」

しかしここで鰐の中でもとりわけ年老いた者が言ってきた。この鰐達の群れで長老でありリーダーでもある長老だ。彼が言ってきたのだ。

「それはな」

「あれっ、長老」

「それはどうしてですか？」

「わし等は河にいる」

まずはそう言うのだった。

第四章

「そして海に出ることはできないな」

「ええ、それは」

「わし等は河に住むものですから」

鱈達もそれはよくわかっていた。河にいるからだ。

「海にいてもやっぱり身体が合わないですよね」

「それだと」

「そうじゃ。そしてそれはこの鮫さんにも言えるのじゃ」

これまで通り始終泳ぎ回っている鮫をさしての言葉だった。

「この鮫さんにもな」

「ああ、そういえばさ」

そして鮫もまた長老の言葉に応えて述べてきたのだった。

「あんた達は普通に止まって寝られるよな」

「ああ、それであんたはずっと止まれないし」

「それに河の水は合うかい？」

「いや、あまり」

しかし実際のところはそうなのだった。鮫は海の中で暮らすものだ。河の中ではない。ここで鮫と鱈の決定的な違いが露わになった。

「実は海の水の方がずっと合うんだよ」

「やはりのう」

長老はそれを聞いて納得した言葉を出すのだった。

「それはな。鮫は海にいるもので鱈は河にいるものじゃ」

「じゃあ鮫はずっとここにはいられないんだね」

「やっぱり海に帰って」

「そうみたいだな」

鮫もそれで納得するのだった。

「わしはやっぱり海にいるのが一番いいな」

「じゃあ帰るのかい？その海に」

「やっぱり」
「そうするのが一番じゃ」
「ここでまた長老が言うのだった。」
「鮫さんにとってはな」
「わかつたさ。じゃあ帰るよ」
「鮫もそれに応えた。」
「わしにとつてもやはりな。ここにいととな」
「身体の調子も悪いからだよね」
「それにやっぱりわしの居場所じゃない」
「このことが一番大きいのだった。」
「わしの居場所はやっぱり海だからな。そこに帰るよ」
「そうか。だったら今から」
「帰るとするさ。じゃあな」
「いや、待たれよ」
「だが長老はここでもう海に帰ろうとする鮫を呼び止めてきた。」
「それはだ。暫し待たれよ」
「何だ？何かあるのかい？」
「ただ一人で行くのでは礼に反する。皆で送りたい」
「あんた達全員でかい？」
「そうだ。わし等皆でだ。海まで送らせてくれ」
「こつ鮫に申し出てきたのだった。」
「海にな。それでいいか？」
「海といつても遠いぞ」
「鮫は長老の方を振り向いてこつ言った。」
「それでもいいのか？」
「いいとも。あんたは大事な客人だ」
「客だからだというのだった。」
「客をもてなし送るのは鰐の誇りだ。だからこつさせてくれ」
「別にそんなことはいらないな」
「いや、こつ言わずにだ」

長老は断ろうとする彼に振り切るようなことはさせなかった。

「是非共頼む。海まで送らせてくれ」

「どうしてもか」

「そう、どうしてもだ」

長老の言葉も強い。

「皆もそれでいいな？」

「ええ、勿論」

「わし等も鰐ですからね」

「是非共それで」

他の鰐達は笑顔で長老の言葉に応えるのだった。やはり彼等も鰐だった。だからこそ長老のその言葉に確かな声で頷くのだった。

「御願いますよ、鮫の旦那」

「是非ね」

「そうか、それがあんた達の心が」

鮫は彼等を見て述べた。そうして今度は彼の方から言うのだった。

第五章

「鰐は礼を大事にするんだな」

「うむ」

鮫のその問いに答える長老だった。

「その通りだ」

「それが鰐のしきたりなら鮫にもしきたりがある」

その鮫の世界での決まりを言葉に出すのだった。

「鮫は相手の心を受ければそれを適える」

「心を受ければか」

「そういうことだ。わしは今あんた達の心を受け取った」

こう告げるのだった。

「今な。だからあんた達の心を適えたい」

「では送らせてくれるのだな」

「是非な」

鮫の口元が笑った。その無数の牙がある口元が笑いそこに心を見
せていた。

「こちらとしても頼む。是非な」

「よし、それでは皆行こう」

「海までな」

「送らせてもらうよ」

こうして鮫は海に帰ることになったがそこまでの道は鰐達が共に
行くことになった。鮫を中心として多くの鰐がガンジス河を下るの
だった。

「おやおや、これは珍しいな」

「鰐が河を下るのか」

「しかも群れの真ん中にあるあの魚見ろよ」

船で河を行き来する人々も川辺に来た動物達も河の中の生き物達
も彼等を見て声をあげた。

「あの魚は何だ？」
「河にいる魚じゃないな」
「あれは何だ？」
「皆わしのことは知らないらしいな」
「鮫はそんな彼等の言葉を聞いて呟いた。」
「わしのことは」
「それも無理ないことじゃて」
彼の横に入る長老がその言葉に答えるのだった。
「何せここは河じゃからな」
「そうだな。わしは海にいる筈だ」
「ここでも自分のことを知ることになった鮫だった。」
「それならな。誰も知らないのも道理だな」
「その通りじゃよ。わし等にしる海だと誰も知らない」
「そうだな。海には鰐はいないからな」
「鮫は自分とは逆のことも述べた。」
「やはり当たり前だな」
「そういうことじゃ。だからやはりな」
「わしは海にいるべきだ」
何度目かのこのことを確かめた言葉だった。
「そして海で暮らすべきだな」
「そういうことじゃな。しかしじゃ」
「しかし？」
「河はどうじゃった？」
「ここで河のことを、自分達のいる世界のことを鮫に問う長老だった。」
「この河は。どうじゃった？」
「いいな」
鮫のその丸い目が細まった。
「わしが知らない世界だというせいもあるがそれを抜いてもだ」
「よかったのじゃな」

「ああ、よかった」

目だけでなくその口元も声も笑っていた。

「とてもな」

「そうか。それは何よりじゃ」

「できればわしのいる海も見てもらいたいものだ」

そして鮫はこんなことも言うのだった。

「是非な。見てもらいたいが」

「気持ちは有り難いがそれは止めておくよ」

だが長老は鰐のその言葉はいいというのだった。

「それはのう」

「いいのか？それは」

「うむ、よい」

こう言って断るのだった。

「それはな。よい」

「そうか。いいか」

「あんと同じ理由じゃよ」

また言う長老だった。

「やはりわし等は河にるのが道理じゃからな」

「海にいるべきではないか」

「鮫は鮫、鰐は鰐」

長老の言葉には深い叡智があった。長く生きているだけあってそれを確かに感じさせるものだった。流石に鰐達の長老だけはあった。

「海と河にそれぞれいればよいからのう」

「そういうことだな。やはりな」

「さて、そろそろじゃな」

長老は前を見て声をかけた。もうすぐ河は終わりその先にある遙かなものが見ようとしていたのだった。それが何か、鮫にはすぐにわかった。

「あれだ」

「あれか？」

「あの深い青い世界がか」

「そうだ、あれが海だ」

河の先には果てしない水の世界が広がっていた。河の淡い青とはまた違う、深い青がそこにはあった。それが海の青だった。

「あれがな」

「そうか。それではここまでだな」

「そうだな」

鯨と長老はお互いを見て声を掛け合った。

「これでな。今までのことは礼を言っ」

「こちらこそじゃ」

「達者でな、あんたも」

「海に戻って楽しくやれよ」

「ああ、そうさせてもらう」

最後に鰐達に別れの言葉を告げて海に帰っていく。後に見送る鰐達の顔は実々にこやかだった。異邦人は今静かに本来の場所に帰り本来の住人達も異郷を見るだけであった。そして彼等はそれで満足するのだった。自分達が住んでいるその世界の中だけで。

異邦人 完

2009・6・10

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1380i/>

異邦人

2010年10月8日15時04分発行